

国語(国語) 光村図書 【前期課程:光村図書、今年度まで光村図書】

国語科における生徒の課題は応用をきかすことである。国語の教材で読むことができたり、単元で書くことをしたりすることはできるが、現実の場面になったときに読んだり書いたりすることができない課題があると考えている。そこについて、本者は知識・技能の応用をきかせて活用する問題や語彙を増やすためのものがある。また、読む力を応用して随筆を読むようなワーク的な問題もある。今後国語科において必要な能力を育成することができると考える。また主体的な学びや個別最適な学びについて、本者は「学びの鍵」というものがあったり、単元の構成を示してあったりするため、それに沿いながら学習を進めていくことができる。そのことで、学習者が出口の姿をイメージしながら学習を進めることができ、指導者は教科書を参考にしながらわかりやすく進めることができる。

Q 各者の言語活動の違いは何があるのか。

A 特に「走れメロス」を例に挙げると、A 者は「走り続けた理由」について語り合い、B 者は「メロスの人物像」を語り合い、C 者は「語り手による呼び方が変化する効果」について話し合い、本者は「作品の魅力」を語り合う構成になっている。少しずつの違いであるが、本者については「魅力」ということから、人物像や変化する効果、理由などについて語り合ったり話し合ったりすることができる。総括的ではあり、難しい課題ではあるが、どの言語活動にも対応し得る内容になっている。他の言語活動を見ても魅力的な言語活動が多いのが本者であると考えている。

Q 特に QR コードによる学びの地図は、どのような課題解決学習を展開するためのコンテンツになっているのか。

A 国語は反復螺旋的と言われている。繰り返しながら学ぶことが望ましいとされている。それぞれの単元で学ぶことが順序だてて整理されて書かれている。このことをそのまま言語活動で行うことは減多にないが、論理の展開を考えるというのはこういうことかということをヒントにしながら、自分自身で考えて学ぶことができるのではないかと考えている。QR コードには教科書以外にも発展問題があり、技能を発揮するためにどのようにすればいいのかということを意識付けられて作られていると考える。

国語(書写) 東京書籍 【前期課程:東京書籍、今年度まで東京書籍】

今後の生き方の中で、生活に役立つ教科書を採用したいと考えた。「ポスター・フリップ」のようなところで書写の技能が生きることを学ぶページが多い。また「手紙」「年賀状」でも学ぶことができる。そもそも題字を書くときに役立つことが示されている。また、毛筆の指導のページでは、筆の位置や力具合を筆の写真で示してあったり、色を分けてあったり、どのように穂先が動いていくのかが分かりやすく示されていたりする。これが日常の鉛筆字でどのように生きるのかが書かれていることもわかりやすい。毛筆のページであっても、硬筆で書くページもあるため、日常生活に役立つことが分かりやすい。書写ノートのように別冊として用意するのではなく、教科書自体に硬筆で書くページが多くあることについては、学習の連続の中で使用できるという良さもある。

社会(地理的分野) 東京書籍 【前期課程:東京書籍、今年度まで東京書籍】

地理の学習は、その地方のことを詳しく学ぶのではなく、その地方を通して地球規模の課題や日本全体の課題になっていることを考えることが、中学校の分野における地理の学習の大切なことである。本者は「つかむ」「調べる」「考える」というサイクルがあり、それが本校の生徒の学びのサイクルに適していると考えた。北アメリカ州の学習を例にすると、本者は導入のページに移民についての言及がなされている。アメリカが発展することによって、アメリカに大量の移民が押し寄せているという地球規模の課題があるということまで踏み込んで、単元を構成しているのが本者であった。移民のことも含めて、本単元で考えたい問い・課題を見いだすことに魅力がある。まとめのページでは、様々な見方・考え方を働かせてアメリカの特徴をつかむが、最終的には探究課題である

経済成長の裏には移民がいて、その移民が押し寄せているという課題に対してどのように考えていくのかという構成になっている。

Q 地図帳のように教科書における QR コードの活用はどのような方法があるか。

A 各者とも多くは基礎基本的な内容の確認、動画資料、NHK for school にリンクが貼られている。映像コンテンツもあって、それほど差異はないと捉えた。その中で本者は二次元コードの数が多い。

Q 領土問題で違いはあるか。

A そこまで違いはない。どこの発行者も取り上げている内容である。

社会（歴史的分野）東京書籍 【前期課程：東京書籍、今年度まで東京書籍】

歴史学習では、どのようなことがあったのかということは大切だが、それだけではなく、生徒たちが歴史的背景はどのようなことがあったのかということについて、事実からこの時代の全体の歴史的背景を深く理解することが大切であると考え。歴史学習の中で今言われていることは、単元全体を見通して、その中で問いや課題を見出して、小單元ごとに、どうしてそのようなことが起こったのか（どうして幕府はほろんだのか、どうして諸外国はアジアに進出したのかなど）を1つの事象ではなく、たくさんの事象を踏まえた上で、生徒たちが小單元ごとに考えを構築し、それを含めて、近代とはどのような時代だったのか、江戸時代はどのような時代だったのかということをつかんでいくことに意味があるということである。それを踏まえると本者は、幕末から明治時代の導入の場面を例に挙げると、幕末から明治にかけてその時代の変容について、最初の「近代化とはどのようなことか」という問いがある。その問いを探究するために、1節、2節、3節、…にどのようなことを学んでいくのかということが整理されている。単元全体を見通して生徒たちが何を学んでいくのかということと一緒に確認できることが本者のよさがある。単元の最後には、近代化ということを多様にまとめるフローチャートや思考ツールを用いたまとめ方が例示しており、単元の学びを生徒と一緒に整理できる作りになっている。まとめについても、出来事について知識理解に偏っているのではないかと考えてしまったり、見通しをもつということに重点を置いていなかったり、また時代全体について理解する作りにはなっていないのではないかと考えた。また今まで学んできたことをディスカッションで促すような活動も、単元の最初にあるといいと考えた。本者と共通しているところがあるが、全体を見比べると本者で学ぶことが有効であると考えた。

Q 歴史の学習で、地理の学習内容がかかわるところはあるのか。

A 近代化とは何かという問いに対して、「近代化とは〇〇です。」とは言えず、色々なことを含めて近代化であると考え。本者は「この時代にはどんなことがあって、この時代はどんな背景だったのか…」ではなく、「近代化とは何なのか」ということを問いかけている。このことから、深い学びが実現できると考える。

社会（公民的分野）東京書籍 【前期課程：東京書籍、今年度まで東京書籍】

公民は地理や歴史で学んだことをいかして、さらに現代社会にある問題を考える。その中に現代社会の見方・考え方がある。その見方・考え方を使って、社会的事象を多面的多角的に考えて、判断していくことが大切な分野である。政治分野の導入を例にすると、本者は A・B・C の候補者がいて、それに対して誰がいいのかだけではなく、そこに人口や世帯数、市の現状、市民の声などを導入で学んで、政治の分野ではどのようなことを学んでいけばいいのかということのを例示されている。この活動が単元の終末につながっていて、この中では、課題だけではなく、解決策、条例案、理想のまちを考えていて、政治にどのようにかかわっていくべきかということまで考える流れになっている。特に政策を考える、立案するというのが、本校の社会科の研究において重要であると考えた。

Q 社会の学習における見方・考え方の部分で、見方・考え方を働かせるための各者の差異はあるか。

A 本者は小学校との接続で、既習した見方・考え方をページに多くなされている。わかりやすさ、使いやすさの部分では本者が本校の生徒に合っているのではないかと考える。

社会(地図) 帝国書院 【前期課程: 帝国書院、今年度まで帝国書院】

地図帳は地図から課題を見いだすという工夫がなされていて、資料として優れている。その中で、例えば中国・四国地方では、教科書でいうと交通網を中心とした考察、交通網というのは地域にどんな影響を与えるのかということを学ぶ単元において、本者での小見出しでは、交通網全体に対して言及されている。本者のように交通網というものを全体的に捉えていて、生徒の学びが豊かになっていくと考えた。また地図帳の活用の仕方として統計資料を用いるということは地理の学習で大切にしている。どちらも統計に大きな差はないが、QR コードを用いた調べ方に差があった。本者は生徒が自分で統計資料を選んで調べ、いかすことができると考える。

数学(数学) 東京書籍 【前期課程: 大日本図書、今年度まで大日本図書】

本者はデジタルコンテンツの種類が中学校3年間で合計648個と、充実している。シミュレーションソフトを活用して図形を操作したり、表やグラフなどを作成したりすることができるので、数学的な表現を用いて、自分の考えを伝え合うことが促され、思考力・判断力・表現力等の育成に期待できると考えた。他教科に関連する教材については、他教科の教科紙面を閲覧できる。このような教科横断的な学びを通して、学習で得た知識・技能を多様な場面で活用する力が育成されたり、日常の場面でどのように数学が活用されているのかを身近に感じながら学習に向かったりすることができると考える。章末には日常における諸問題の解決のための数学的な見方・考え方を働かせる問題が配置されている。また、データの活用領域では1つの題材について、単元を通して学んでいくような形がとられている。代表値やデータを度数分布表に整理してヒストグラムに表していく学習において、その表現方法の違いに着目して学べることが強みだと考える。

Q 9年間の教科における効果的な学びをしていこうとする中で、発行者が違うデメリットは何で、それによる学びのひずみはあるのか。

A メリットは、本者はデジタルコンテンツが多いことが挙げられる。生徒たちが考えを進めていく課程において、これまでの学習内容を振り返ることができる。問題提示においても日常の場面をどのようにして数学的に考えていくのかといった提示の部分も工夫されている。数学を通して身に付けたい力は本者を用いることで確実に身に付けることができると期待している。デメリットについては、発行者が変わったとしても、内容の系統は変わらないということから、デメリットはないと考える。全領域において教科書を読んでも、飛躍を感じる表記はなかった。また算数の学習を振り返るページも本者には掲載され、生徒が自分で立ち戻ったり、確認したり、振り返ったりすることができる場所が教科書に位置付いているため、前期課程と発行者が違っても、デメリットはないと思う。

Q 観点③すべてに○が付いている。数学的の本質的な学びに向かうことについて本者の教科書にはないことについて、どのように担保しようと考えているのか。

A 既習内容を振り返る場面の設定については、単元が始まる前のページにはそのような記載がないが、ページの中で教科書のキャラクターが既習内容を想起できるようなコメントがあるため、既習に立ち返って想起できる工夫はある。前期課程の学習にまで意識が行くような振り返りは、巻末にあるまとめのページによって、網羅されていると考える。探究に関わる題材については、どの発行者にも記載されている。特に本者については巻末に探究できる題材が記載されている。単元末ではなく、巻末に位置付いているため、意識的にその題材を活用していく指導はしていく。

理科(理科) 東京書籍 【前期課程: (理科) 大日本図書 生活(東京書籍)、今年度まで東京書籍】

探究を通して身に付けさせたい力について、どの発行者も力を入れて記入してあるが、本者は問題を見出すことについて、基本的には日常生活のあらゆる場面から見付けられるような工夫がある。問題発見をしていること

や、問題を解決するための目標、課題が「？」という表記で記されている。なぜそのような問題が起きているのかという仮説を立てて、その仮説を検証する方法を構想してというような、探究を通して身に付けたい探究の過程がはっきりと示されている。本者はすべての実験やページ、活動の中に入っている。理科は、科学的に探究する力を育むことが、一番身に付けたさせたい力であり、そこに力を入れているのが本者であると考え。教科書の中を見ると、「この分野はこの理科の見方・考え方を働かせることができる」ということが、その実験や考えている問題について、適宜表記されている。本校の理科部の研究内容として、理科の有用性を実感できる児童生徒の育成であって、学んできたことがどのように日常生活に関わっているのか、学んだ力がどのように発揮できるかというところまで考えることができるようになってほしいと考えている。本者は他教科との関連や日常生活との関わりを取り上げているコラムが非常に多く、活用と題して、探究課題が毎回の授業の最後に「学びをいかして考えよう」として位置付いている。毎回の授業の中で、こんなふうに活用できるといった、探究課題があるため、その後のさらなる探究につなげて、研究主題の究明に向かうために、非常に適した教科書であると考え。

Q 問題解決的なプロセスは発行者によって違うのであれば、前期課程とは別の発行者を選択したことによってそのプロセスの違いが生まれることに対するデメリットは何か。

A 発行者によって探究のプロセス自体は変わらないが、表記の仕方が違う。前期課程は取り扱っている内容がより日常的なものを取り扱っている教科書にした。本校の理科部の研究内容として、日常生活のつながりといった理科の中にとどまらない理科の力を日常生活でも発揮できるという視点で見ている。それを前期課程の発達の段階に合わせた教科書にした。前期課程では探究の過程を同じように回すが、後期課程ではそれを踏まえ、7年生では問題を見出して、8年生では計画立案に力を入れて、9年生では探究全体を振り返って科学的に探究するというのが、前期課程の学習の上に乗っかっていく。その7年生、8年生、9年生で重点を置きたいことが本者はわかりやすく、本校の生徒が見たときにもわかると考える。

Q 発行者が変わることによるデメリットが、9か年の指導内容や指導過程を編成し直したときに、上手く回るのか。一般の人から見れば、発行者が違っているのに、9ヶ年の指導過程の一貫性を求めるのであれば、発行者が一緒の方がわかりやすい。あえて同じものを選ぶというスタンスではないことに対する主張はできるか。

A どの発行者でも探究の過程自体は変わらない。同じ流れで組んであると考える。私たちがより重視したのは前期課程と後期課程の理科の科学的な段階である。それに照らし合わせたとき、前期課程はより日常生活に近いコンテンツを取り扱っている教科書を使用している。日常生活から問題を見出して、日常生活に返ってくところが前期課程に関してはできる。それを踏まえたとき、本者は前期課程とのつながりが、一番わかりやすいと考える。それは、今ここで学んでいることが、〇〇に関わっていることが明確になったり、5年生でやっていることとリンクできたりするということが、各ページに適宜必要となるところに書いてある。後期課程の視点で見ると、一番合っていると考えた。

Q 発行者が違くと、見方・考え方や知識・技能で取り扱いがうまく接続できないということはないか。

A 小学校の教科書を見ているが、コンテンツ自体に問題はない。

音楽(一般)教育芸術社【前期課程:教育芸術社、今年度まで教育芸術社】

前期課程でも同じように本者を使用しているため一貫性が保たれることと、生徒にとって親しみがあると考え。一般的に音楽科は学ばせる要素を大切にしている。教科書は教材としての楽曲が入っている。本者はそれぞれのページにQRコードが付いている。これは、生徒たちがタブレットで入れば、それぞれの教材について勉強できる。これがすべての所についていることが大きなポイントである。音取りの面であったり、鑑賞の教材であったりしてもワークシートまでついてきたり、多様なデジタルコンテンツで個別最適な学びを支援できる。最初の目次のページについて、本者は左側に思考力・判断力・表現力と知識・技能といった3つの資質・能力が分類されていて、それぞれの教材で何を育むことができるのかということを見ることのできるのが魅力的である。

さらに音楽科は前期課程とのつながりを大切にしている。前期課程と同じ楽曲を使って着目する音楽や形作っている要素を学ばせることが音楽的な学びである。その要素を発展的に同じ楽曲の中でも前期課程と後期課程でも共通した教材を使いながらも変わってくところがある。例えば、前期課程のある鑑賞教材になっているものが、後期課程になると表現教材として扱われていて、情景を思い浮かべながら言葉を大切に合唱しようとなる。しかも混成三部で音色の部分や強弱、旋律といった部分もできる。この曲は「歌詞から情景を思い浮かべることができる曲である。」ということは6年生のときに勉強しているので、そこからそれを自分たちで表現してみようというのが、後期課程での学びになる。このように一貫して学びを6年生からつなげてできるというところにある。

また、音楽の領域では鑑賞と表現と創作がある。特に創作の部分では各学年で発展的に学習ができるようになっている。構成について、7年生では場面構成で、自分たちが考えた情景を表すにはどんな要素を使って、どんな工夫をすればいいのか、リズムだけではなくて色々なパターンや強弱、要素を使って考えてみようとなっている。8年生はリズムと音の重なりがあって、さっきの要素を生かしながら、単音だったけれども音を重ねてみてアンサンブルにしてみよう、さらにリズムという要素をたして色々なパターンを考えてみよう、自分の作りたい曲に合うようなものを考えてみようという要素が増えている。9年生になったら単音のリズムではなくて、和音になる。要は旋律だけではなくて、それに合った伴奏も考えていくということで、1つの楽曲制作をしようというように3学年を通して付けた力で最終的に自分の願う音楽が、音楽の作品として創作できる。このように達成度を味わうことができると思っている。

次に日本の伝統的な音楽ということについて、音楽的な要素について、本校の実態に合っていると考える。ある歌舞伎の音楽的な部分で見ると、声の音色の抑揚というところで、長唄の旋律と音色という部分なので、体一つあれば音楽的な表現を体感することができる。

最後に、音楽科の研究として生活と社会の中に音楽を通して、社会とつながることである。そのように考えたとき、本者は社会の中の音楽という部分が3学年を通して位置付いている。生活や社会の中の音や音楽として、音楽を通して社会とつながり、人と人をつなぐという部分で、色々な学びが各学年に入っている。

著作権のページも各学年にある。実際の学びの中から著作権につなげるという部分もあるから、ポピュラー音楽を勉強する本校の生徒にとって、そのポピュラー音楽を価値として高いものとしてみたときに、著作権ということは大事であることを、学びを一貫してつながっている。自分たちの中で大切にしていこうとする思える教科書構成になっている。

音楽(器楽合奏)教育芸術社 【前期課程:教育芸術社、今年度まで教育芸術社】

本者は要所に探究的な学びができるような要素に関わって、「こういうことわかる?」という問いかけがある。本校で扱うのは箏である。だから、器楽の教科書で使うのは箏、もしくは楽器のないリズム打ちをすることになる。そう考えたとき、前期課程の教科書の箏について、教科書的な扱いではあまり大きくないが、本校の5年生は「さくらさくら」を演奏する。それは簡単な方の「さくらさくら」という演奏曲で、後期課程の教科書にはさらにそこから奏法を増やして演奏をする「さくらさくら」の全曲というのが載っている。演奏方法が増えるということと、強弱記号が付いているということ、さらにその右側のページにマイメロディといってその「さくらさくら」から旋律づくりができるようになる。

美術(美術)日本文教出版 【前期課程:日本文教出版、今年度まで日本文教出版】

美術に関しては教科書の中身の題材を必ずやらなければならない、すべてをやらなければいけないといわけではない。発行者が題材をたくさん用意しているが、中学校3年間でやれる題材は8題材である。そこにプラスア

ルファがあるかどうかというくらいである。どちらかというと美術の教科担任が、こういう題材で生徒を育てたいという熱量から、オリジナルの題材を扱うことが多い。そのようであるため、教科書は他の生徒作品や作家作品を見て、生徒の発想を耕すとき、見方や考え方を育むときに使用する。あとは、技法を習得するときに使用する。資料集は情報量が多いので、それも活用して、教科書と並行して使用している。ただし、ここ数年で教科書が変わっていく中で技能の部分の情報量が増えてきた。

本者は3年間で3冊の構成になっている。必ず1冊ずつの巻末に学びを支える資料ということで、知識や技能に関するとところがある。資質・能力に応じた3観点の学習目標が題材の最初に位置付いており、造形的な見方・考え方につながり、深めるような造形用語が多数出てくる。

実際に自分が授業で使用すると思ったとき、魅力的な題材として、9年生の最後の授業で使用するゲルニカを例にして説明する。その中では、ピカソがどのような生き方をして、自分の特技を生かして、どうやって世界に平和を伝えようとしているのかを切り口にしている。最後は生徒に「どんな自分の強みで社会に出ていくのか。」と問うている。そのような授業をしようとしたとき、本者はピカソから始まるのではなく、池田学という佐賀出身の方から始まる。この方は3.11のときにアメリカで生活していて、そのときに東日本大震災のニュースを聞いて、自分の思いを絵に託していることから始まる。戦争から始まるわけではなく、自然の驚異や生きていく辛さがあって、その喜びもあった作品の続きでゲルニカの作品がある。このことから本者はゲルニカだけで美術の力を付けるのではなく、様々な作家にも触れさせることで、美術の力を題材の中に組み込もうとしているところに良さがあると思う。

あとは7年生の題材に「家族にコースターを送る」というのを工芸領域で設定している。食器に焦点を当てて、こんなものが作れるよということが出ている。7年生の授業でやりたいこととフィットしているのが本者である。

また、中に出てくるQRコードを使った動画の資料には、木材加工という視点で色々な動画がある。糸鋸の使い方、オニメヤスリにかけ方、小刀の使い方、それぞれの彫刻刀の堀跡の紹介がある。それだけではなく、先ほどの実際に使用したい技法を1つ1つ紹介して、説明している。示範で彫り方を教えた後に、生徒が自分でQRコードを読み取って見返すことができる。陶芸についても、本者は土を取ってきて、それを練って焼いて、釜入れ、釜出しの所まで全部網羅している。職人しか使わないドベの話もある。このようにQRコードによる技能の補足が、細かいところまでやっている。

風神雷神の鑑賞について、屏風という工芸品の機能について指摘している。また美術用語がたくさん出てくる。さらに前期課程でも本者を採用しているため、9年間を見通して学習を仕組めると思う。

保健体育(保健体育)東京書籍【前期課程:東京書籍、今年度まで学研】

大きく主張したいところは生徒の実生活に結び付けやすい所である。教科書を使って気を付けなければならないことが身近に感じられるから、生徒の思考に引っ掛かりやすい所がある。また学習者の生活経験で足りない部分があったとしても教科書の動画で、自分で進んで学ぶことができる。また生活でリアルに困ること(熱中症や暗い道のこと等)に対して、どのように身を守っていくのかということに対して、丁寧に記載されている。生徒が使うということを意識した構成になっている。全体的にどの者も記載が大きくなった。資料の扱いが大きくて見やすい。大きくなったが、その扱い方が違う。その記載を見たとき、生徒の思考の流れが見やすいのが本者である。QRコードに対しては、どの内容についての動画なのかが、記載を見て分かる。動画の中でも、生徒たちが体育や部活動において自分たちでもやれそうなことをポイントとして示してある。このように自分で動画を選んで学びを進めることは個別最適な学びになっていく。性に関するところについて、性については性別だけの問題ではないということ考えたときに、本者は「異性など、他の人への関心が…」という表記が、親切であると思う。

Q 1単位時間の学習過程を6段階に分けて構成することについて、本者の6段階が優位である理由は何か。

A 6段階というところではなく、「活用」というところに着目している。本者は自分事で考えられそうな活用できる場面がある。

Q 身近な生活に関連しているという点から、今の本校の生徒に必要な学びがよりできるという解釈でよいのか。

A 保健体育での指導を振り返ると、生徒指導や日常生活で指導できることがありながらも、体育として教えていることと分離していることがもったいないと思っている。その中で、本者を使用したら、リンクさせることができるのではないかと期待感がある。

技術・家庭(技術分野) 東京書籍 【今年度まで東京書籍】

本者は1冊に使いやすくまとめている。デザインについて、技術は3つの章があって、その章がページのツメの所で見やすくデザインされている。目的のページを探しやすい。また本者は、技術の見方・考え方が関東の資料によってまとめている。そこに立ち返りながら授業を進めることで、生徒の思考を整理しやすい。情報のプログラミング学習で、本校で使用している、マイクロビットやスクラッチについて、そのプログラムの例示がある。QRコンテンツについて、本者は前回よりも大幅に増えている。各ページにQRコードがほぼ載っている。切断の動画についても、手元の動画や左利きの動画といった種類が豊富である。

技術・家庭(家庭分野) 東京書籍 【前期課程:東京書籍、今年度まで東京書籍】

技術・家庭科で一つの教科であると考えたときに、技術分野と発行者をそろえたい。家庭科の目標であるよりよい生活を自分たちで創り上げていくということに向かっていくためには、見方・考え方を働かせて学習を進めていく。その見方・考え方を働かせることができるために、本者の場合は、各項目に見方・考え方の表記がある。さらにQRコードについて、大切なところをスロー再生ができたり、視覚的に理解できるように字幕も表示されたりしている。

Q すべてのページにQRコードがあるのだが、その内容はどのようなものか。

A そのページに関係していることが掲載されている。家庭科は特に技能教科だから、毎時間タブレットを使いながら授業をすることができる。以前は目次にQRコードがあって、そこにすべての動画が集約されていたが、今回は細かく分けて掲載されているため、すぐに必要なページにとんで活用できる。また前期課程も本者を使用しているため、関連させながら動画を活用して学習を進めることができる。

Q 本者は重量があるが、家庭科の教科書は学校に置いて行ってもよいのか。

A 学校に置いていっている。テスト前だったり、長期休暇前だったり持ち帰っている。

外国語(英語) 東京書籍 【前期課程:東京書籍、今年度まで東京書籍】

見やすさもあるが、内容として段階的に学んでいける本者を採用したいと考えている。その理由として、前期課程は聞くこと、話すことを中心としたやり取りを重視して学習を進めているのに対して、後期課程になると読むこと、書くことが増えるため、そこに抵抗を感じる生徒も少なくない。特に7年生の4月のはじめの授業では遊びやゲーム、話すことを中心としたコミュニケーション活動から入って、少しずつ文字を読んだり書いたりする活動の構成になっている。少しずつ読むことや書くことが増えていく中で、特に7年生の内容は聞くこと、話すことといったやり取りを中心とした内容となっている。前期課程も本者を採用しているため、学びの手順も同様な構成で進めることができる。単元の出口には、活動ごとに目的や場面状況が設定されていて、生徒が目的をもって表現活動に取り組んだり、相手意識をもって活動したりできる。

デジタルコンテンツについて、カナダの生徒のビデオレターに対して答えたり、自分の考えを述べたりできる。学年が上がるにつれて、国際的な問題にも触れているので、英語を通して考えることができる作りになっている。ま

た、本校はラウンド学習を実施していることを踏まえたときに、単元で学んだ内容を自分の言葉で表現する活動があるのだが、デジタル教材の中に、単元で使用したスライド写真といった場面がすぐにわかる写真やコンテンツがまとめられていて、生徒たちもそれを見て自分の言葉で伝えるという活動もしやすい。また本校で行っているスモールトークで利用できる表現リストが一覧になって載っているのが本者の特徴である。デジタルコンテンツについても、7年生では語順を定着させるカードがあってそれを生徒が並べ替えて使用することもできる。

特別の教科 道徳（道徳）日本文教出版 【前期課程：光文書院、今年度まで教育出版】

問題解決的な学習と体験的な学習が本者は6時間配置されている。また道徳ノートも用意されていて、そのノートにはすでに発問を用意されているわけではなくて、自分たちが考えたいことを自由に書くことができる。このように授業者や生徒の思考に合わせた記述がしやすくなっている。学び方について、どの発行者も示しているが、本者はシンキングツールやクラゲチャートなどと分かりやすく示されている。

Q 現代的諸課題という視点からみたとき、どのように考えているか

A いじめ問題やSDGsといった内容について、本者は学習した後に視野を広げるために、コラムを活用して、扱った問題に対して、生徒たち自身が興味をもてるようなプラスアルファの所がある。

Q 今後の道徳の授業では、問題解決的な学習を進めていきたいのか。

A 今、どう生きるかで進めている学習でも大切にしていた学び方をつなげて学習を進めていけるようにしていきたい。